



HEART to HEART

Q&A

9～11月こうのとり外来の成績

編集後記

HEART to HEART

『 決断の時 』

〈Kさん〉

子どもを“生む”ことはできなかったけれど“育てる”ことはできるようになった。子どもを生めなかった事には後悔も未練もない。「この子がなにより大事」と思えるから。



私は30代半ばから40までの数年間、諏訪マタニティクリニックでお世話になった。体外受精の回数は、初めのうちこそ把握していたが、そのうち数えるのをやめたので詳しくはわからないが、相当数に上るはずだ。皆さん同じだと思うが、当初は毎回の治療のたびに大きく一喜一憂し、期待に反してダメだとわかった時のダメージは耐え難く、帰りは必ず車の中で大声で泣いた。今でもよく覚えているのは、何回目かのトライのこと。今日は受精卵をお腹に戻す日だからと仕事を休んで、朝の状態を電話で確認した際、「受精はしているが、戻せる状態では無いので、来院しなくても」という説明を受けたことがあった。電話だけではすぐには納得できず、とにかく病院に行きますと答えて行った。見せていただいたその受精卵の写真は、素人の私が見ても悪い状態だとわかる、とても着床に至るとは思えないようなもので、だから、遠方から通う私への配慮だったのだとすぐにわかったのだけれど、それにしても何度も何度も頑張っているのにこんな結果しか出せない自分自身があまりに情けなく、私は初めて診察室で泣いてしまった。いつもなるべく冷静に思っているのに、その時はどうにも堪えられず泣きじゃくってしまい、先生や看護師さんたちも何と声をかけたらいいのかというような表情で見つめていらしたのを覚えている。

その事があって以降だと思うが、私は、いい意味で、治療について「少し肩の力を抜く」ことができるようになっていった。あまり大きく期待をし過ぎない、たとえダメでも「せっかく諏訪まで来てるんだから温泉でも入って帰ろう」とか、何か楽しみをみつけて、自分を落ち込ませ過ぎないように、気持ちをコントロールしようと心がけた。夫との会話でも「最近強くなったね」と言われ、「打たれ強くなったかな」などと応えて笑えるような、そんな雰囲気になっていった。

そして、おそらくその辺りから、漠然と治療を“卒業”するとすれば、どんな形なのだろうというようなことを考えるようになっていったのだと思う。治療の卒業なら、すなわち妊娠・出産であって欲しいし、その期待感はもちろんまだまだ大いに持っていたが、反面「でもやっぱりダメなのだとしたら、どうやってやめるのかな？」とも考え始めていた。そして、先生にも聞いてみた事がある。「いつまで治療は続けられるものなのか。どうなったらやめるべきなのか」と。いただいた答えは「排卵があるうちは続けられる」というものだった。それはそうだ。それならばまだ当分続けられそうだと嬉しい反面、では排卵が

なくなるまで卒業しないのか、どこかで意を決してやめるということはあるのかなのか、それは何をきっかけにやめる気持ち固めるのか、誰が決めるのでもない、自分自身の決心なのだろうけれど、そんな決心は自分にできるのかどうか……など。“治療”そのものへの思いと平行して、“治療の卒業”に向けての迷いや悩みが次第に強まっていった。

そんな中、私が模索し始めたのが「里親になる」ことだった。治療を卒業して夫婦2人の暮しをエンジョイする、もちろんそれも大事な選択肢だが、それよりも、血縁は無くとも“子ども”とともに歩む人生というのはどうだろう、そんな風に思い始めていた。里親に関して全く知識が無かったので、ネットなどでいろいろ調べてみた。そして、重要な点に気がついた。それは「年齢」だった。

「里親」と一言で言うが、実際のところ近年は「特別養子縁組」をするケースが多い。従来の「里親」は、生みの親に代わって子どもを家庭で育てる役割をする人のことで、親ではない。子どもは生みの親の姓のままだし、里親とは法律上の関係はない。（とはいえ、大事な“家族”であることは間違いないが…。）対して「特別養子縁組」をするというのは、裁判所の厳格な審判を経て、子どもと生みの親との法律上の関係は無くなり、養親のみが子どもの親になることで、実の親子となんら変わりない関係になるというものだ。

「里親」になることに、年齢的な規制はあまりないが、「特別養子」とするには、親と子の年齢差が“40歳”くらいまでが望ましい、というような表現をみつけ、私はおやっと気になった。中には、特別養子を望む人は40歳までと、年齢制限を設けた紹介機関もある。理由としては、子育てに費やす体力とか、教育のための経済力とか、そういったことがあるようだが、それにしても40歳ならもうすぐやってくる、さてどうしよう…。治療の卒業をまだ決心できてはいなかったが、一方で、里親→養子縁組という方法も、私の気持ちの中では次第に現実味を帯びていった。

ただ、夫の気持ちは、私とはかなり違った。“血のつながらない”子どもを育てるといのは、とても責任の重いことで、自信が持てないというのが当初の反応だった。子育ては多分とても大変なもので、その大変さを乗り越えていくには「自分の血を分けた子だから」という事実が無い限り、根を上げたくならないのではないか、というのが夫のとらえ方だった。私が「子どもなんて皆かわいい」と言ってみても、そんな簡単なことではないと、とても慎重に考えていた。それもそうだろうと思う。不妊治療の原因になっていたのは私なのであって、夫に問題は無かったのだから、なかなか“自分の子”を諦めきれない気持ちは強かっただろう。また、男性ならではの責任感の強さも、より慎重な発言につながっていたのかもしれない。その辺りの2人の話し合いは、しばらく平行線をたどっていた。しかし、年齢のことが気になっていたのも事実だったので、迷いを残しながらも、私達は「里親登録」をした。

里親に登録したところで、すぐに子どもとのご縁があるわけではない。なにより、まだ制度のこともしっかり把握し切れていないし、気持ちの整理ができていくわけでもない。そこで、私達は、いくつかの勉強会や研修などに参加した。実際に里親となっている方の話を聞いたり、児童福祉の専門家の話を聞いたり、本を読んだり。そんな中で、ある時、夫の気持ちが、変

わった。当初は、「生みの親から子どもを引き離してしまうことになる」という抵抗感を持っていたのだが、研修などを通じて知ったのは、「世の中には、どうしても一緒に暮していかれない親子があるのだ」ということ。そして、里親や養親は、そういうやむを得ない事情の生みの親に代わって、子どもを大切に育てていくものなのだという。夫の中で、すっと胸に落ちたことがあったのだろう。そこから先は、具体的に子どもとのご縁に少しでも近づくため、どうしたらいいのかを、2人で考え行動した。そして、おそらくこの辺りで、私達は、まだわずかな希望を持って続けていた治療を「卒業」した。

その後、ありがたいことに、私達には子どもとのご縁話があって、今は子育ての真っ最中だ。子どもを迎えてから、生活は一変し、自由な時間はほとんどなくなった。毎日が本当に慌しく忙しい。でも、これはおそらく、子育て中の家庭ではどこでも同じような光景だろう。何より、子どもの事はかわいくて仕方がない。それは夫も同様で、お風呂に入れたり、保育園に迎えに行ったり、とてもまめまめしく面倒をみている。先日、夫の友人が遊びに来た際、一杯やりながら一言、しみじみと、「親ばかりでこういうものかっというのがわかったよ」と語っていた。その言葉を聞いて、私は胸が熱くなった…。

長く治療を続けて、結局、私は子どもを“生む”ことはできなかったけれど、子どもを“育てる”ことはできるようになった。子どもを生めなかった事には、後悔も未練もない。「この子がなにより大事」と思えるからだ。だが、治療が無意味なものだったということでは、決してない。あんなにたくさん悩んで、涙して、夫ともとことん話し合っ、だから今があるのだと、つくづく思うからだ。くじけそうになっても、なんとか自分を励まして、次の目標に向かって努力する、そんな力を、不妊治療を通して身につけることができたのかもしれない。それでも、一人ではなかなか越えられない時には、たとえば相談室でお茶を飲ませてもらったり、ちょっと弱音をはかせてもらったり、そんな風に支えられてなんとか乗り越えさせてもらったのだと思う。いろいろと辛いことがあったからこそ、今ある幸せに「ありがたい」という感謝の気持ちを忘れてはいけなと、強く感じている。

子どもはまだ小さく、かわいいかわいいで今はいいが、今後は“血のつながり”のことで、大きく壁にぶつかる時がきっと来るだろう。ことに思春期には、間違いなく悩まされる事になると思う。そんな姿に、私達も心を揺さぶられたりすることもあるかもしれない。しかし、それを今から恐れていても仕方が無い。悩み苦しむ子どもに、私達もできるだけ寄り添い、支えてあげるしかないのだと思う、親として…。

(特別養子の年齢について、実際には40歳以上の年齢差の親子は数多くいます。)

〈Yさん〉

どんな些細なことでも人は選択しながら毎日をごして歳を重ねていく。〈子供〉を諦めるのではなく、目先を変えて《子供ではない何か》を選択し前に進もうと思う。



「お子さんはどうしますか？」婦人科検診で聞かれたのが治療の始まりだった。大きな筋腫が見つかり、地元の医師は手術を勧めるつもりだったのだろう。30才台最後の年。子供が要らないわけではない、欲しい時期に夫婦の気持ちのタイミングが合わず、いざ欲しくても出来ないまま過ぎてきた。『病院に行っても…』とも思っていた。でも、『もうリミットが近づいている』と思ったら、“一通りの検査で異常が無ければ(可能性があるなら)やってみよう”と遅いスタートラインに立った。

“病院に行けば簡単に出来るんじゃないか”と高をくくる反面、“実母が41才で亡くなっているし(病気が原因だが)この歳から治療を始めるのはかなりのチャレンジャーだよ”とやや諦めの気持ちと両方だった。諏訪マタを紹介されてからの治療、やはり簡単には妊娠しない。年齢のせいもあるのだが、普通だっってそう簡単に妊娠はしないのだ。『子供は授かりもの』と痛感した。いくつもの過程を経て、命が宿る。どのひとつがかけても命が生まれることは無い。

検査の結果、決定的な不妊原因はないようだが、結局体外受精まで治療は進んでしまった。主人は「やるだけやってみよう。でも、回数は重ねない。出来ないなら、それでもいいよ。」と。はじめは一度きりと決めたものの結果は、“着床しかけた”状態だった。人間って欲が出る。「もう一度だけね」と主人に言われ二度目に挑戦。わずかながら妊娠反応あり。まんざら諦めたもんじゃないな…と思うのもつかの間、一週間後には数値が下がり卵の成長がストップ。先生を目の前にして涙がこぼれた。これには自分でも驚いた。ダメだった、と主人に伝えた時も大泣き。心のどこかで諦めていても、本当は子供が欲しいんだ、と思い知らされてしまった感じで、それがショックだった。確かに治療を始めてから、他人の赤ちゃんを直視できない自分が居た。なんて心が狭い奴なんだ、と自分が嫌にもなった。「もういい」と言っていた主人も「最後の一回ね」が変わった。二度目で反応がなければ止めていたと思う。でも三回目は反応なし。そして最後のつもりが嬉しいことに「胚盤胞1個」が凍結できた。最後に凍結卵が出来るなんて…。胚盤胞は妊娠率も高いようだ。もう期待している自分が居る。

治療の辛いのは何回治療を受けたら必ず出来ると約束されたものではないこと、費用対効果ではないこと。そして一番辛いのは、自分ではどうにもならないこと。説明会で吉川先生が話されていたことを思い出す。移植の度に、プリプリとした神秘的な卵に心の中で話しかける。判定までの間もまだどうなるか分からないお腹の中の卵に話しかける。それくらいしか出来ないから。でも結果は神様にしか分からない。治療を経験した友人も「ご縁」だからと言っていた。“不妊治療=子供が出来る”ではなく、“出来やすくする”なのだ。回数を重ねるうちには妊娠できるかもしれない。でも数回補助してもらって出来ないなら、自然なことと受け入れてもいいかな、と思える。このことをこの三回の体外受精で納得できてからは、最後の移植で子供が授からなくても私のこの先には「子育てより楽しい事が待つて